

# 大学生の就職活動が個人の成長を促す実証的研究

## —自己受容度と社会的コンピテンス能力の視点から—

今村邦弘 小西美希 佐倉宏和 藤本舞弓

1998年3月卒業

関西学院大学社会学部卒業論文

### 目次

◆ 序論

◆ 方法

◆ 結果

◆ 考察

◆ 参考文献

◆ 資料

---

「大学4年生の最大の関心事は就職のようである」(加藤、1992)。春先になると毎年、就職活動応援本や、企業、業界のことを詳しく書いた雑誌、書物が書店をにぎわしリクルートスーツを着た学生たちが真剣な面持ちで見入っている。納得のゆく内定取得は、大部分の学生にとって重要なことのひとつである。ところで、これまでの学生の就職活動に関する学術的研究では、学生の志望業種や男女差など、学生の就職に対する意識に焦点を当てたものがほとんどである。

しかし、我々は就職活動を通じて学生の意識は刻々と変化し、成長すると考えた。アメリカの職業心理学者D.E.スーパーは、「職業的発達」という概念を「職業生活に入るために万全の準備を整えていく過程」だと述べ、その中でも、もっとも重要なことは「自分自身についての認識を深めつつ」、「自己を確立させていく」過程がその根底になければならないと言う。そして自己と周囲の環境的世界を客観的に評価し、両者をアイデンティファイ(統合)することが就職活動であり(小林、渡辺、1980)、また就職活動を通じて養われると考えた。そこで就職活動をする学生を対象に自己受容度とコンピテンスについて、春季(4月)と秋季(11月)に同一の質問紙を用いて調

## 方法

研究の第一歩として、就職活動を成功(主観的な判断基準によるのではなく、企業からの内定や公的機関からの採用を意味する)を取得するために必要な要素を文献から絞り出し、その中の二つの要素の変化を測定することにした。よく言われるのは、「就職活動は自己分析と企業研究の繰り返しである」(就職ジャーナル、1997)とすることだ。我々はまず、測定対象として自己受容度に着目した。自己受容とは「自己の現実の姿についての正確な観察を行ない、その姿をありのままに受け入れる」(Combs & Snygg,1949)ことである。就職活動をすすめるにあたり学生は繰り返し自己分析を行ない、「自己の良い面も悪い面も積極的に受け入れる」(佐倉、1997)という精神的作業を繰り返すと考え、調査内容の要素とした。また、もう一つの調査要素として、我々はコンピテンスに着目した。コンピテンスとは、環境との交流の積み重ねの結果生じるもの、つまり効果的に環境と相互作用する能力と定義される(White,1959)。企業分析や採用面接などで徐々に理解を深めていく社会の中から自己を生かせる環境を探し出し、内定取得という目標達成のために自己と社会環境をコミットメントさせていく過程こそ、就職活動であると考えた。

自己受容の尺度としては、1996年度の立木ゼミ3回生の研究で作成された自己受容測定尺度(石原、佐倉、高木、富岡、西原、長谷川、1997)を用いた。自己受容測定尺度は、4つの構成概念とその下に属する9の下位変数からなる28項目の尺度である(表1-1参照)。

コンピテンス尺度は栗本(1997)によって作成された尺度を用いた。コンピテンス測定尺度は3つの構成概念と10の下位変数からなる30項目の尺度である(表1-2参照)。

表1-1 自己受容測定尺度の理論モデル			
下位尺度(構成概念)	変数		項目数
『自己信頼』			
	「現在」	ret(現在)	5項目
	「未来」	ret(未来)	2項目
『自己価値』			
	「肯定的」	val(+)	3項目
	「否定的」	val(-)	4項目
『自己承認』			
	「肯定的」	adl(+)	3項目
	「否定的」	adl(-)	3項目
『自己理解』			
	「認識」	u(認識)	4項目
	「表現」	u(表現)	2項目
	「分析」	u(表現)	2項目
表1-2 コンピテンス尺度の理論モデル			
下位尺度(構成概念)	変数		項目数
『社会的知識』			
	「規則・常識」	sk(規則・常識)	4項目
	「適切さ」	sk(適切さ)	2項目
	「不適切さ」	sk(不適切さ)	2項目
『共感』			
	「無関心」	em(無関心)	4項目

	「肯定感情」	em(対肯定感情)	2項目
	「否定感情」	em(対否定感情)	4項目
	「博愛」	em(博愛)	2項目
下位尺度(構成概念)	変数		項目数
「場のコントロール」			
	「クラス内」	lc(クラス内)	4項目
	「環境」	lc(環境)	3項目
	「効用」	lc(効用)	3項目

表2 探索的因子分析の結果

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6	因子 7	因子 8	項目
Q54 a(信値)	.75	.08	.20	.22	.11	-.07	.05	.05	自分はつまらない人間だ
Q11 a(信値)	.69	.14	.23	.11	.11	-.05	.08	-.01	自分は将来成功しないだろう
Q37 a(信値)	.68	.14	.20	.24	.19	-.20	-.00	.04	自分はどうしようもない人間だと思う
Q5 a(信値)	.67	-.01	.32	.12	-.06	.27	.02	.04	私は自分に自信がある
Q43 a(信値)	.67	.16	.18	-.04	.07	.04	.00	.21	自分が今までやってきたことを誇りに思う
Q13 a(信値)	.66	.11	.28	.12	.21	-.09	.21	.05	自分は役に立たない人間だ
Q23 a(信値)	.65	.04	.17	.01	-.09	.02	.04	-.09	自分の将来はバラ色だ
Q8 a(承認)	.65	.17	.12	.04	-.11	.04	-.04	.00	自分のことが好きである
Q40 a(信値)	.64	.11	.20	.16	-.02	-.09	.14	.01	自分の力を信じていることができる
Q10 a(信値)	.61	.07	.24	-.01	-.01	.02	.05	-.04	自分は貴重な存在である
Q34 a(承認)	.59	.16	.02	.27	.15	.34	.00	.14	自分のやってきたことは失敗ばかりであった
Q30 a(承認)	.57	-.10	.01	-.07	.05	.22	.05	.12	今の自分に満足している
Q16 a(信値)	.56	.12	.16	.22	.15	-.16	.01	.07	生きていても仕方がないと思う
Q44 a(信値)	.56	-.05	.41	.20	.20	-.09	.04	.08	自分は頼りにならない
Q57 a(承認)	.54	.26	.02	.03	.10	.32	.08	.04	今の自分を受け入れることができる
Q28 a(信値)	.53	.25	.16	.02	.10	.04	-.07	.08	自分がしていることはいつか笑えると思う
Q22 a(承認)	.50	-.08	.12	.34	-.03	.04	.10	-.06	自分の容姿に劣等感を持っている
Q12 a(信値)	.49	.08	.26	-.01	-.14	-.27	.02	-.00	自分は他人にないものがある
Q25 e(-)	.08	.77	.06	.22	.12	-.06	-.11	.10	友達が落ち込んだ顔をしていても何とも思わない
Q19 e(+)	.24	.70	.08	-.11	-.09	-.07	.31	-.11	友人が喜んでると自分もうれしくなる
Q27 e(-)	.08	.69	.04	.18	.15	-.09	-.25	.20	他人が悲しんでいても、自分に害が及ばない限り関係ない
Q41 e(-)	.13	.67	.09	.25	.02	-.12	.20	-.03	友人の相談に乗るのはめんどうくさい
Q20 e(+)	.29	.66	-.01	-.07	-.06	-.14	.26	.00	友達の良い話を聞くと、自分もうれしくなる
Q24 e(-)	.05	.63	.09	.24	.14	-.04	-.14	.31	人がけがをしているのを見ても、別になんともない

Q42 e(+)	.15	.63	.10	.04	.05	.13	.01	.00	友達が届ち込んでいけば、気持ちを分かってあげようと思う
Q46 e(+)	.02	.58	.18	.06	.24	.18	.09	-.05	友達がため息をついていると「どうしたん？」と聞いてみる
Q56 e(+)	.17	.54	.28	-.06	.12	.14	-.08	.17	自分が何かすれば幸せになる人がいるのなら、何とかしてあげたい
Q17 e(+)	.12	.50	.06	.08	.38	.18	-.17	.15	他人を気遣うのは当然のことだ
Q35 e(+)	-.01	.45	-.08	-.06	.01	.33	.08	-.11	友達から悩みを相談されたとき、「もし私だったら…」と考える
Q50 e(+)	-.08	.43	-.07	-.05	.25	.17	.00	.32	ニュースで悲惨な事件を聞くと、胸が痛む
Q26 li(+)	.37	-.00	.74	.07	.10	.06	-.00	.01	自分には人を引っ張っていく力がある
Q36 li(+)	.17	.12	.73	-.09	.08	.01	.18	-.04	グループで何かをするときにはみんなをまとめた
Q55 li(+)	.25	.14	.70	.17	-.05	.18	-.10	-.05	活発に意見を発言する
Q49 li(-)	.18	.11	.68	.03	.06	-.10	.05	.16	クラスのリーダーなどに選ばれるのは私にとってつらいことだ
Q38 li(+)	.26	.05	.67	.07	.13	.00	.15	-.11	私とその気になればみんなを動かすことができる
Q21 li(-)	.13	.15	.65	-.29	-.07	.07	-.20	.05	話し合いの場ではあまり意見を言いたくない
Q4 li(+)	.23	.04	.47	.11	-.02	.20	.05	.01	私の言動は周囲に何らかの影響を与える
Q39 u(認識)	.24	.15	.14	.67	.19	.07	.15	-.04	自分の性格を自分でも理解できない
Q7 u(認識)	.33	.14	.08	.67	.23	.05	.17	-.00	自分のことが良く分からない
Q53 u(認識)	.23	.16	.22	.64	.03	.21	.19	.14	自分がどういう人間か人には説明できない
Q18 s(-)	.14	.15	-.06	.26	.68	-.08	-.03	.03	本当のことを言ってしまうと気持ち悪い雰囲気になることがしょっちゅうだ
Q1 s(+)	.13	.12	.04	.03	.63	.10	.00	-.07	この一言は今言うべきでないという判断ができる
Q29 s(-)	.05	.03	.16	.10	.61	-.07	-.04	.26	常識がないとよく言われる
Q15 s(+)	.05	.25	.17	-.16	.57	.15	.22	.07	場の雰囲気を壊さないように気をつける
	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6	因子 7	因子 8	項目
Q52 s(-)	-.03	.07	-.05	.06	.44	-.21	.21	-.09	グループ内で面白くないことがあるとすぐ顔に出してしまう
Q9 u(表現)	.16	.15	.25	.37	-.07	.60	.09	.09	自分の長所と短所がすぐに言える
Q51 u(表現)	.16	.11	.21	.50	-.05	.51	.13	.10	自分の特徴がすぐに言える
Q3 u(分析)	.06	.01	.11	.12	.08	.14	.75	.06	客観的に自分を見つめることができる
Q14 u(分析)	.15	.11	.01	.33	.05	-.05	.62	.15	主観的にしか自己分析できない
Q48 u(認識)	.18	-.06	.01	.18	.12	.39	.42	-.05	自分のことは自分が一番良く知っている
Q2 s(-)	.08	.15	.10	.09	-.00	-.06	.02	.80	規則は守っても守らなくてもよいものである
Q45 s(+)	.16	.08	-.07	-.01	.09	.10	.12	.79	規則やルールはきちんと守る

本調査の対象は98年度に新卒で就職をする学生(調査群)である。春季調査は、97年4月26日に関西学院大学で行なわれた学内セミナー参加者を対象に行なった。有効回答数は150名であった。秋季調査は、97年11月に、春季調査に協力いただいた学生に、郵送で行なった。有効回答数は79名であった。比較検討のため、同大学の3回生(対象群)に、同時期に、同一の調査を行なった。理学部を除く全学部を対象に、ゼミナールを一つの単位として、クラスターサンプリングの形式で行なった。春季、秋季の有効回答数は、それぞれ126名と115名であった。

質問紙は、上述の自己受容尺度とコンピテンス尺度を、一つにまとめた尺度を使用した。尺度の信頼性( $\alpha$ )係数は、自己受容が0.915、コンピテンスが0.849である。

なお、今回の調査結果を因子分析した結果、自己受容の質問項目で、「自己理解」の概念はきれいな因子に分かれたが、その他の概念は入り乱れて、「自己承認」「自己信頼」「自己価値」を一つの因子として解釈せねばならなくなった。(表1、3参照)

そこで自己受容に関して過去の研究をレビューしてみる。宮沢(1978)によると、自己受容における「自己概念とは対象としての自己および自己の行動に対する知覚やそれに対する態度・感情・評価などをさしたものである」という点で、多くの研究者の自己概念に関する見解は一致している」とあり、自己を知覚することと、知覚した自己に対して何らかの態度、感情、評価を持つことの2つに大別できる。

Crowne & Stephens (1961)らによると、自己受容性は「自己評価における満足の種類」とまとめている。Combs & Snygg (1949)は「自己受容性とは自己の現実の姿についての正確な観察を行ない、その姿をありのままに受け入れることである」としたが、Rogers(1949)以来その自己受容的な人の持つ評価的側面をとらえての実証的研究が行なわれ、自己受容性は、Crowneらの述べるように「自己に対する肯定的態度をさす概念」として使われている。つまり自己受容するためには、まず自己をよく知り、その上でそれらを否定することなく受け入れることだと述べているのである。

Wylie (1974)、北村(1977、1978)、梶田(1988)などは自己受容が自己評価や自己認知とほぼ同義と述べており、また沢崎(1993)は「自己認知は自己受容の前提条件あるいは必要条件と考えられるが、社会的に望ましくないと言われる自己の属性に対する受容を問題にした場合、望ましい属性に対する受容はそれほど困難ではないが、望ましくない属性に対する受容は一般的に困難であり、望ましくない属性が受容されるということはそのことに対して否定的な感情を持たない、こだわらない、とらわれないといった状態なので、自己受容は自己に対する肯定的な評価であるのみ考えるのも一面的であると言っている。つまり、「人は普通、自己像の全体に対して、全面的に肯定か否定か、満足か不満かのどちらかの態度をとるのではなく、自己像のある側面については満足し、肯定し、別のある側面については不満を感じ、否定的であるといえよう。そこで全体の自己像のある側面は好ましい自己、よい自己、または自分の強いところであると思われ、別の側面は好ましくない自己、悪い自己、または自分の弱いところと認められることになる」(北村、1977)とある様に、「好ましい自己」は積極的に受け入れ、「好ましくない自己」には執着したり、とらわれたりしない、この両者のバランス感覚が重要であるといえる。

まとめると、自己受容には、まず第一に自己をよく知ることが必要で、第二にその知った自己がよいものである場合には積極的に受け入れ、よくないものである場合には否定的な感情を抱いたり、とらわれたりしないという、二つの側面が少なくとも存在するということである。

そのようなわけで、今回使用した自己受容測定尺度(石原・佐倉・高木・富岡・西原・長谷川1997)での調査の結果、元々あった4因子を2因子に統合し、「自己理解」はそのまま「自己理解」に、「自己承認」「自己信頼」「自己価値」は「自己容認」という一つの低位概念にまとめた。上述の内容から納得いただけると思う。

「自己容認」概念は、a(admire)と表記することとした。「自己容認」概念の変数として、「価値」(a(価値))、「信頼」(a(信頼))、「承認」(a(承認))の3つとした。

また、項目の中には他の項目と結びつきが弱かったり、他の概念で構成される因子と結びついたものがあり、自己受容項目で2つ、コンピテンス項目で4つの計6つの項目を削除した形で、その後の分散分析等を行なった。削除した項目は以下の項目である。

Q6 自分がやりたいことは困難にぶつかってもやり遂げる。 I(+)

Q31 私には何かをやり遂げる力があるはずだ。 I(+)

Q32 自分のやりたいことに、少しでも邪魔が入ったら途中であきらめてしまう。 I(-)

Q58 相手が大人でも、普段と全く同じ話し方で話している。 s(-)

Q33 10年後のイメージがよく浮かぶ。 a(+)

Q47 人をうらやましく思う。 a(-)

なお、自己受容測定尺度、コンピテンス尺度は、共に信頼性の高い尺度である。今回の調査では2つの尺度を混ぜて同時に被験者に回答していた大たために項目に矛盾が生じたのである。これらの尺度の信頼性を問うための調査ではないことをお断りしておきたい(表3参照)。

## 結果

### 1. 平均得点の検証

自己受容、コンピテンスともに春季に比べ、秋季の平均得点は伸びた。しかし比較群に比べて目立った相違は見られなかった(表3-1、3-2参照)。

表3-1 対象群(4回生)の平均得点と標準偏差

		有効回答数	平均得点	標準偏差(SD)
自己受容	春季	150	97.17	14.75
	秋季	79	99.80	15.48
コンピテンス	春季	150	101.98	11.85
	秋季	79	103.04	10.86

表3-2 比較群(3回生)の平均得点と標準偏差

		有効回答数	平均得点	標準偏差(SD)
自己受容	春季	126	93.81	15.62
	秋季	115	100.23	14.61
コンピテンス	春季	126	95.91	11.83
	秋季	115	98.89	11.10

### 2. 共分散分析

秋季の自己受容、コンピテンスに対する就職活動の影響を調べるため、それぞれに対して共分散分析を行なった(表4-1、4-2参照)。しかし、有意な効果は示さなかった。

表4-1 秋の自己受容度に対する共分散分析の結果					
変動員(source)	自由度(df)	平方和(ss)	平方平均(ms)	F	Pr > F
就職活動	1	132.53	132.53	0.95	0.33
補助変数(春の自己受容度)	1	15668.24	15668.24	112.46	*
誤差	162	22570.73	139.3254938		
全体	164	38283.61	233.4366463		
					*P<.0001
表4-2 秋のコンピテンスに対する共分散分析の結果					
変動員(source)	自由度(df)	平方和(ss)	平方平均(ms)	F	Pr > F
就職活動	1	15.06	15.06	0.21	0.65
補助変数(春のコンピテンス)	1	8518.85	8518.85	117.35	*
誤差	162	11760.33	72.59462963		
全体	164	20815.18	126.9218293		
					*P<.0001

### (3)分散分析

①春季、秋季のそれぞれの自己受容、コンピテンスに対する分散分析を行なった。(表5-1、5-2、5-3、5-4参照)その結果、コンピテンスにおいて、春季、秋季ともに学年のF値が有意となった。



表 5-1 春の自己受容に対する分散分析の結果

変動員(source)	自由度(df)	平方和(ss)	平方平均(ms)	F	Pr > F
学年	1	771.78	771.78	3.36	0.07
誤差	274	11664.08	42.56963504		
全体	275	21859.58	79.48938182		

表 5-2 春のコンピテンスに対する分散分析の結果

変動員(source)	自由度(df)	平方和(ss)	平方平均(ms)	F	Pr > F
学年	1	2520.83	2520.83	17.99	0.0001
誤差	274	38394.98	140.1276642		
全体	275	40915.81	148.7847636		

表 5-3 秋の自己受容に対する分散分析の結果

変動員(source)	自由度(df)	平方和(ss)	平方平均(ms)	F	Pr > F
学年	1	8.6	8.6	0.04	0.84
誤差	192	11664.08	60.75041667		
全体	193	43045.48	223.0335751		

表 5-4 秋のコンピテンスに対する分散分析の結果

変動員(source)	自由度(df)	平方和(ss)	平方平均(ms)	F	Pr > F
学年	1	806.92	806.92	6.67	0.01
誤差	192	23226.43	120.9709896		
全体	193	24033.34	124.5250777		

② 4回生の春季の自己受容、コンピテンスに対して、3回生秋季との間で、学年を変数として共分散分析をした結果、コンピテンスに有意さが生じた(表6-1、6-2参照)。

表6-1 4回生春の自己受容に対する分散分析					
変動員 (source)	自由度(df)	平方和(ss)	平方平均(ms)	F	Pr > F
学年	1	78.43	78.43	0.36	0.5
誤差	248	53934.22	217.4766935		
全体	249	54012.66	216.9183133		
表6-2 4回生春のコンピテンスに対する分散分析					
変動員(source)	自由度(df)	平方和(ss)	平方平均(ms)	F	Pr > F
学年	1	893.98	893.98	6.43	0.018
誤差	248	36763.09	148.2382661		
全体	249	37716.7	151.4726908		

平均得点の検証、共分散分析と分散分析から分かったことは以下の通りである。

### 自己受容

対象群（4回生）の春季から秋季にかけて平均得点の伸びは見られる。しかし比較群(3回生)に比べて目立った相違はなく、むしろ比較群の伸び方が大きかった。共分散分析の結果、対象群の秋季の自己受容に対して、就職活動は有意な効果を示さなかった。分散分析の結果、学年(対象群と比較群)の違いは春季、秋季それぞれの自己受容に対して有意な影響があるとは示さなかった。

### コンピテンス

対象群（4回生）の春季から秋季にかけて平均得点の伸びは見られる。しかし比較群(3回生)に比べて目立った相違はなかった。共分散分析の結果、対象群の秋季のコンピテンスに対して、就職活動は有意な効果を示さなかった。分散分析の結果、学年(対象群と比較群)の違いは春季、秋季それぞれのコンピテンスに対して有意な影響が見られた。対象群の春季に対して、3回生秋季との間で、学年を変数として共分散分析をした結果有意さが生じた(図2参照)。

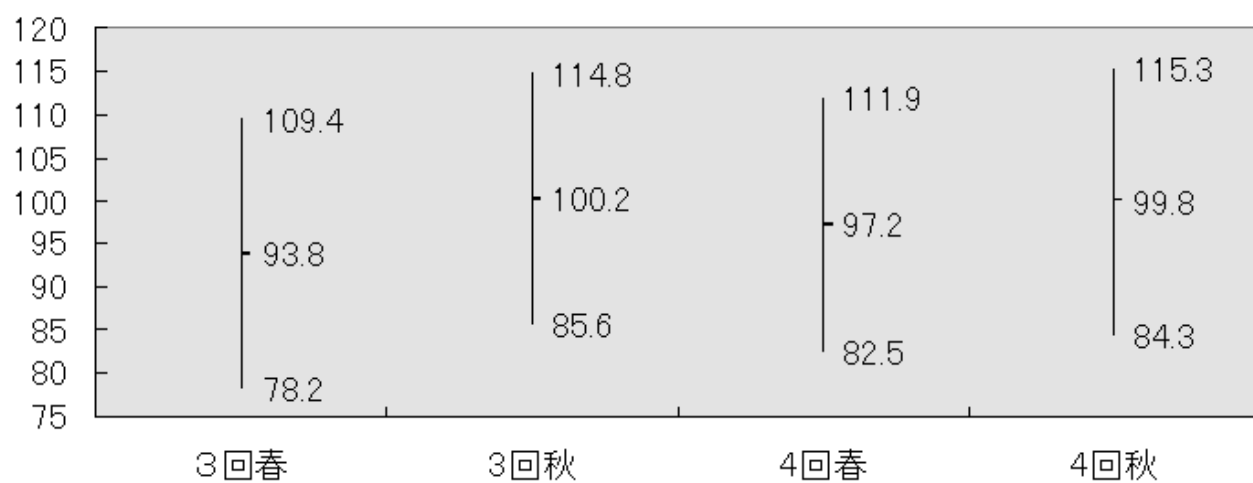


図1 自己受容の平均得点

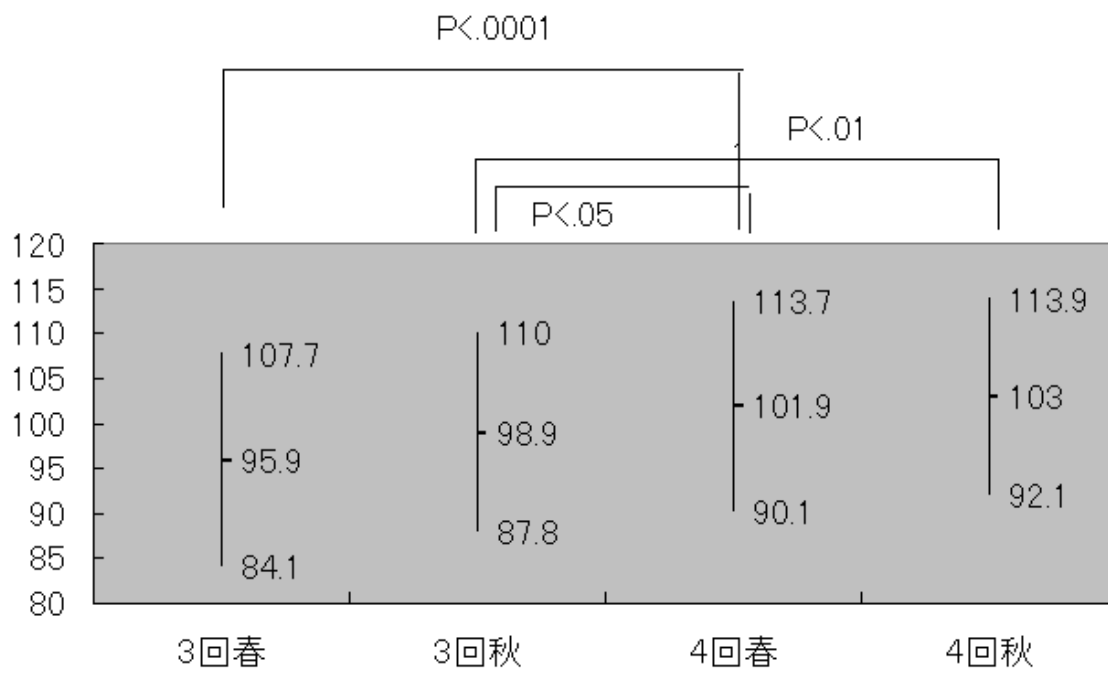


図2 コンピテンスの平均得点

## 考察

調査の結果は、就職活動を通じて学生は自己受容とコンピテンスの成長を促すという我々の仮説を実証するものとはならなかった。仮説を実証できなかった原因は、調査時期の不備にあると考えられる(図3 参照)。前述したとおり、調査は、春季が4月下旬～5月上旬、秋季が11月上旬から下旬にかけて行なった。

4回生の春季と3回生の秋季との間で学年を変数として分散分析をした結果を見ると、コンピテンスに有意さが生じた。つまり、3回生の秋季から4回生の春季にかけて、コンピテンスが伸びているのである。3回生の秋季から4回生の春季の間にコンピテンスを伸ばす何らかの要因があり、その要因の大きな一つは、今年度より就職協定が廃止されて前倒しとなった就職活動であろう。春季調査の時点の対象群はすでに就職活動の影響を受けていた。今年度は、4月時点ですでに内定を得ていた学生もあり、春季調査を実施した4月下旬～5月上旬には、就職活動がかなり進んだ学生が大勢おり、コンピテンスはピークポイントに近い状態であったと思われる。

また、3回生の秋季に関しても4回生の春季同様、就職活動の影響をすでに受けていたであろう。調査を実施した関西学院大学で比較群(3回生)を対象に就職活動のためのセミナーを開始したのが9月下旬であった。秋季調査に至るまでに、比較群に就職活動に対する意識があったことは否めない。

自己受容も対象群の春季はもちろん、比較群の秋季の時点でも就職活動が影響していると考えられる。対象群の春季が低いのは、「はじめてぶつかる社会の壁に打ち砕かれて、自身もやる気も木っ端微塵」(杉村、1997)の常態に多かれ少なかれなっていた学生の自己受容が下がってしまったためであろう。実際に企業の人と会い、受け入れてもらえなかった焦りや自信喪失が、自己受容にマイナスに影響したと考えられる。

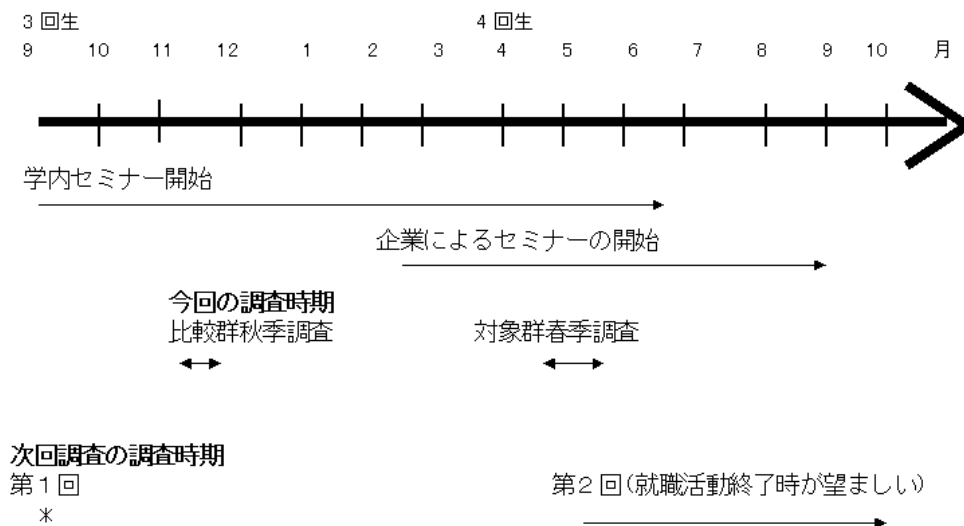


図3 今回の調査時期と次回の調査時期

我々の仮説は、就職活動を終了した時点で自己受容とコンピテンスが伸びるというものである。就職活動を行なう学生は、いったい自分とはどういう人間なのかと考えたり、これから飛び込んでいく社会の知識や理解を深めようとする。その中で、自分を見失って自己不確実(広井、1980)や、アイデンティティ拡散(鱸、1990)に陥ったりする。また、自分を確立していたとしても、それが磐石のものでなければ、企業からの内定がなかなかもらえないと、自分に自信を持てなくなる結果となるだろう。そんな中で、家族や友人そして大学の就職指導などを通して、ほんのちょっとしたアドバイスや支えにより、多面的、多角的に自分や社会を見詰めることができ、新しい発見やさらなる意欲へとつながり得るであろう。実際に企業の人と会い、面接をする中からも、これらを得られるだろう。自己について悩み、将来について不安を抱き、ある企業からは不必要の烙印を押され落ち込む。自己を再び見つめ直し、周囲の人の支えをありがたく感じながら再度、成功目指してがんばる。就職活動はこれらの繰り返しである。悩み、苦しみさえも、成長し成功を得るためのモチベーションとできた時に就職活動を納得して終わらせるのではないだろうか。

今回の調査では、就職活動を通じて学生が成長することを実証できなかった。調査時期の不備が大きな原因であろう。次回の調査では、就職活動の影響をほとんど受けていない3回生の9月と、その学生たちが就職活動を終えた直後に調査をして、比較検討されることをのぞむ。



## 参考文献

石原愛・佐倉宏和・高木彩余・富岡潤子・西原清子・長谷川千明 「大学生における自己受容に関する研究：他者からの受容と自己受容の関係について」、1997

Crowne,D.P.,Stephens,M.W., & Kelly,R. The validity and equivalence of tests of self -acceptance. The Journal of Psychology,51,101-112. 1961

加藤諦三 『いま就職をどう考えるか』、PHP文庫、1992

加藤諦三 『自分の構造』、PHP文庫、1992

加藤諦三 『成功と失敗を分ける心理学』、PHP文庫、1992

梶田叡一 『自己意識の心理学(第2版)』 UP選書 東京大学出版会 1988

岸田博 『来談者中心カウンセリング私論』 道  
和書院 1990

北村晴朗 『新版 自我の心理』 誠信書房  
1977

北村晴朗 『自己及び自我 北村 晴朗編著 人  
間の心理』 南窓社 1978

栗本かおり 「青年のコンピテンス尺度作成」『関西学院大学社会学部紀要』、78号、1997、145-152

Maluccio,A.N. Competence-oriented social work practice: An ecological approach, In Maluccio., A.(ed.) Promoting competence in clients. 1-25,Free Press

宮沢秀次 「青年期における自己受容性の一研究」 『名古屋大学教育学部紀要』25、105-117、1978

Rogers,C.R. Counseling and psychotherapy : New Concepts in Practice. Houghton Mifflin. 1942(佐治守夫編 友田不二夫訳 『カウンセリング ロージャズ全集2』、岩崎学術出版社)

Rogers,C.R. Some Directions and End Points in therapy. In Mowrer,O.H. (Ed.) Psychotherapy. The Ronald Press. 1953 (伊東博編訳 『セラピィにおける方向と終極点 ロージャズ全集4』 第5章 岩崎学術出版社)

Rogers,C.R. A Process Conception of Psychotherapy. American Psychologist, 13, 142-149. 1958 (伊東博編訳 『サイコセラピーの過程 ロージャズ全集4』、岩崎学術出版社 1966)

Rogers,C.R. , & Dynomd,R.F. Psychotherapy andPersonality Change. University of Chicago Press. 1954 (友田不二夫編訳 『パースナリティの変化 ロージャズ全集13』、岩崎学術出版社 1967)

沢崎達夫・真仁田昭・小玉正博 「青年期における自己認知と自己受容に関する研究(1)」 『教育相談研究』19、43—64、1981

沢崎達夫 「自己受容に関する文献的研究(1)—その概念と測定法について」 『教育相談研究』22、59—67、1984

沢崎達夫 「自己受容に関する研究(1)—新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性」 『カウンセリング研究』26(1)、21—27、1993

沢崎達夫 「自己受容に関する研究(2)—男女大学生における自己受容の様相を中心として」 『カウンセリング研究』27(1)、46—52、1994

杉村太郎 『就職勝利学 '98』、マガジンハウス、1997

杉村太郎 『絶対内定 '98』、マガジンハウス、1997

鱸幹八郎 『アイデンティティの心理学』、講談社、1990

中西信夫・麻生誠・友田泰正 『就職 大学生の選職行動』、有斐閣選書、1980

Wylie,R.C. The Self Concept : Revised Edition, Vol. 1, A review of methodological considerations and measuring instrument. University of Nebraska Press. 1974



資料

			非常に当てはまる	少し当てはまる	どちらともいえない	ほとんど当てはまらない	全く当てはまらない
1.	この一言は今言うべきではないという判断ができる。		5	4	3	2	1
2.	規則は守っても守らなくてもよいものである。		5	4	3	2	1
3.	客観的に自分を見つめることができる。		5	4	3	2	1
4.	私の言動は周囲に何らかの影響を与える。		5	4	3	2	1
5.	私は自分に自信がある。		5	4	3	2	1
6.	自分がやりたいことは困難にぶつかってもやり遂げる。		5	4	3	2	1
7.	自分のことがよく分からない。		5	4	3	2	1
8.	自分のことが好きである。		5	4	3	2	1
9.	自分の長所と短所がすぐに言える。		5	4	3	2	1
10.	自分は貴重な存在である。		5	4	3	2	1
11.	自分は将来成功しないだろう。			4 4			

11.	自分は将来成功しないだろう。		5	4	3	2	1
12.	自分は他人にないものがある。		5	4	3	2	1
13.	自分は役に立たない人間だ。		5	4	3	2	1
14.	主観的にしか自己分析できない。		5	4	3	2	1
15.	場の雰囲気壊さないように気をつける。		5	4	3	2	1
16.	生きていても仕方がないと思う。		5	4	3	2	1
17.	他人を気づかうのは当然のことだ。		5	4	3	2	1
18.	本当のことをいってしまって気まずい雰囲気になることがしょっちゅうだ。		5	4	3	2	1
19.	友人が喜んでると自分もうれしくなる。		5	4	3	2	1
20.	友達のいい話を聞くと、自分もうれしくなる。		5	4	3	2	1
21.	話し合いの場ではあまり意見を言いたくない。		5	4	3	2	1
22.	自分の容姿に劣等感を持っている。		5	4	3	2	1
23.	自分の将来はバラ色だ。		5	4	3	2	1
24.	人がけがをしているのを見ても、別になんともない。		5	4	3	2	1
25.	友人が落ち込んだ顔をしていても何とも思わない。		5	4	3	2	1
26.	自分には人を引っ張っていく力がある。		5	4	3	2	1
27.	他人が悲しんでいても、自分に害が及ばない限り関係ない。		5	4	3	2	1
28.	自分がしていることはいつか実ると思う。		5	4	3	2	1

29.	常識がないとよく言われる。		5	4	3	2	1
30.	今の自分に満足している。		5	4	3	2	1
			非常に当てはまる	少し当てはまる	どちらともいえない	ほとんど当てはまらない	全く当てはまらない
31.	私には何かをやり遂げる力があるはずだ。		5	4	3	2	1
32.	自分のやりたいことに、少しでも邪魔が入ったら途中であきらめてしまう。		5	4	3	2	1
33.	10年後のイメージがよく浮かぶ。		5	4	3	2	1
34.	自分のやってきたことは失敗ばかりであった。		5	4	3	2	1
35.	友達から悩みを相談されたとき、「もし私だったら…」と考える。		5	4	3	2	1
36.	グループで何かををするときにはみんなをまとめた い。		5	4	3	2	1
37.	自分はどうしようもない人間だと思う。		5	4	3	2	1
38.	私とその気になれば、みんなを動かすことができる。		5	4	3	2	1
39.	自分の性格を自分でも理解できない。		5	4	3	2	1
40.	自分の力を信じることができる。		5	4	3	2	1

41.	友人の相談に乗るのはめんどくさい。		5	4	3	2	1
42.	友達が落ち込んでいれば、気持ちを分かってあげようと思う。		5	4	3	2	1
43.	自分が今までやってきたことを誇りに思う。		5	4	3	2	1
44.	自分は頼りにならない。		5	4	3	2	1
45.	規則やルールはきちんと守る。		5	4	3	2	1
46.	友達がため息をついていると「どうしたん?」と聞いてみる。		5	4	3	2	1
47.	人をうらやましく思う。		5	4	3	2	1
48.	自分のことは自分が一番よく知っている。		5	4	3	2	1
49.	クラスのリーダーなどに選ばれるのは私にとって辛いことだ。		5	4	3	2	1
50.	ニュースで悲惨な事件を聞くと、胸が痛む。		5	4	3	2	1
51.	自分の特徴がすぐに言える。		5	4	3	2	1
52.	グループ内で面白くないことがあるとすぐ顔に出してしまう。		5	4	3	2	1
53.	自分がどういう人間か人には説明できない。		5	4	3	2	1
54.	自分はつまらない人間だ。		5	4	3	2	1
55.	活発に意見を発言する。		5	4	3	2	1
56.	自分が何かすれば幸せになれる人がいるのなら、何とかしてあげたい。		5	4	3	2	1

57.	今の自分を受け入れることができる。		5	4	3	2	1
58.	相手が大人でも、普段と全く同じ話し方で話している。		5	4	3	2	1

ご協力ありがとうございました